

南小泉式土師器高杯に見られる2種類の成形技法

— 復元製作体験レポート —

石本 弘

1 はじめに

筆者は、『研究紀要 2008』で栗圀式土師器杯の復元製作の過程で、土師器成形技法に関して1つの問題点を指摘した。今回は、古墳時代中期の南小泉式土師器のうち、高杯の成形技法についていくつか気づいたことがあったので、その観察結果と実験的成形の結果を報告する。

土器は、何らかの力が加わって破損するが、比較的薄い部分に衝撃が加えられて破損する場合と、接合部に衝撃が加えられて破損する場合がある。前者の場合は破断面がギザギザになり、割れている方向もバラバラである。これは多くは器体の厚みによって、薄く弱いところ、例えば口縁部などが破損する場合である。これに対し、後者の場合には破断面は比較的滑らかなものが多く、割れている方向は横方向が多い。これは器体の接合部で多く見られる破損である。土師器の高杯の場合には口縁部や脚裾部では前者の場合が多いが、杯部と脚部の接合部分では後者の場合が多い。筆者は福島県石川町の古宿遺跡^(註1)

Ⅱ区1号住居跡出土の南小泉式土師器の高杯に底部と体部の境界で、後者のように剥がれたような破断面を見ることができた。これは底部と体部の接合が弱かったためと考えられる。しかし、土器を紐作りで成形する場合、底部の円板と最初の粘土紐には乾燥の時間差は少ないし、入念に接着するので、この部位で剥がれてしまうことは少ない。このことから、底部から体部の接合部には乾燥の時間差があると考えた。また、体部の剥がれた内底面が異様に平坦なことも、当該時期の杯の内底面が播鉢状を成していることを考えると違和感がある。さらに、当該時期の高杯の脚部内面には、紐作りの時の粘土紐接合痕が見られるものがあるが、この接合痕の重なりが、体部に見られる痕跡とは逆になっている。このことから、脚部の成形は倒立の状態で行われているのではないかと考えた。通常、口縁部の口作りの仕上げに使われ

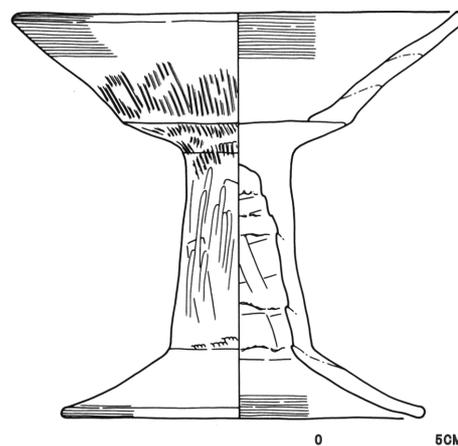
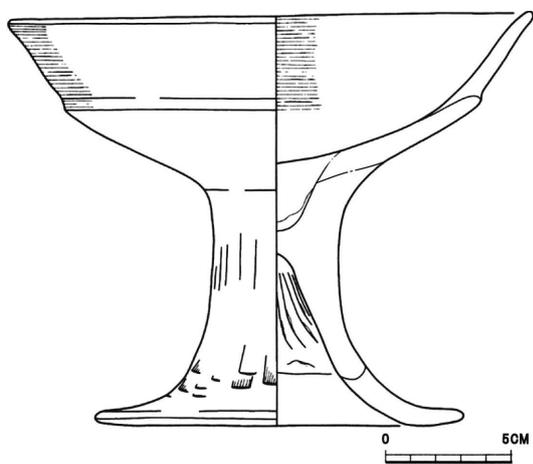


図1 古宿遺跡Ⅱ区1号住居跡高杯

るヨコナデが、脚部末端に施されていることも、脚部の倒立成形を物語る証左の1つと考えた。そして、脚部倒立成形の土台となるのが、表面が平坦になっている杯部の底部ではないかという想定を導き出した。つまり、南小泉式土師器の高杯を成形する時には、杯部の底部を基盤として紐作りで脚部を成形し、半乾燥を経て正立で体部から口縁部を成形するのではないかという仮説である。



筆者は、古宿遺跡の南小泉式高杯の類例を求めていく過程で、古宿遺跡例とは異なる成形技法を行ったと思われる高杯を見出した。それは、福島県玉川村江平遺跡^(註2)5号墳出土の南小泉式高杯である。2点出土しているが、いずれも古宿例のような典型的な南小泉式高杯とは異なった形態をしている。杯部の底部は深く、内底面は挿鉢状を呈する。脚部は基部が太く、柱状部から裾部へなだらかに広がっている。古宿例との成形技法上の違いは2点ある。1点は杯部内底面が平坦でないことから、底部から脚部の成形工程にもう一工程ある可能性があることである。もう1点は、内底面中央に粘土塊で穴を塞いだような痕跡のあることである。

これら2種類の南小泉式高杯の成形技法を、小稿では「古宿技法」と「江平技法」と仮に呼称する。そして、次の章では、復元製作体験を通して、これらの技法を検証していきたい。



これら2種類の南小泉式高杯の成形技法を、小稿では「古宿技法」と「江平技法」と仮に呼称する。そして、次の章では、復元製作体験を通して、これらの技法を検証していきたい。

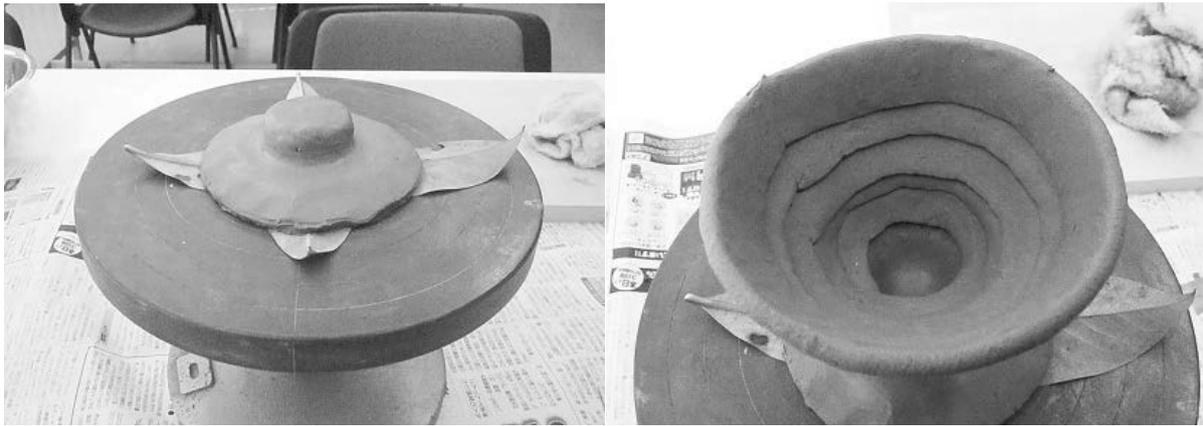
2 復元製作体験による検証

(1) 「古宿技法」による復元製作体験

復元製作体験にあたっては、『研究紀要2008』の小稿に基づいて、ヨコナデが施された土器はロクロを用いて成形しているとの考えから、市販の「手ロクロ」を用いる。成形技法は陶器製作で言う「紐作り」で行う。

まず最初に、ロクロの盤面に木葉を敷く。今回は冬期だったので常緑樹のユズリハを用いた。その上に粘土円板を据える。次に、円板の中央に円柱状の粘土塊を圧着する作業に移る。この作業で

図2 江平遺跡5号墳出土高杯



① 杯底部と脚基部

② 脚部の紐作りの状況



③ 脚柱状部の内面

④ 脚部の成形終了



⑤ 杯部の紐作りの状況

⑥ 高杯の成形終了

図3 「古宿技法」による高杯の成形

は、円板と円柱が良く密着するように、粘土を泥状にした「ドベ」を塗って接着剤とする。接着した円柱を基礎として粘土紐を接合しながら柱状部を形成して行く。粘土紐は内側に重ねて貼り付けて行くので、図3-②の写真のような皺が残る。6本ほどの粘土紐を重ね合わせて行くと、ラップ状に広がった形状になる。モデルとした南小泉式の高杯1住20は、脚部が円柱状になるので、ロクロをゆっくり回しながら、両手で包み込むようにして圧迫しすぼめて行く。この作業によって、脚部は円柱状になるが、内側に縦皺ができる。このような縦皺はナデ

ツケやケズリで消されていることが実際の類例には多いが、しばしば消されないで残るものもある。この後脚部の裾を成形するため、粘土紐を3本ほど追加し、ロクロの回転を利用して薄く引き伸ばす。末端はヨコナデで仕上げる。この段階で脚部末端が固くなるまで乾燥させる。概ね一晩くらいで末端から乾燥し、脚部を正立させても変形しないくらいになる。次の工程は杯体部の成形である。ロクロに杯底部を上にして固定し、粘土紐を接着して行く。このとき底部は乾燥が始まっているので、ドベを接着面に塗ってなじませる。これが不十分に行われると、この部分で破損しやすくなるのである。4本ほどの粘土紐を重ねあわせ、ロクロを回しながら手指で引き伸ばし、竹製の「コテ」を用いて口縁部を押し広げながら成形した。口縁部はさらにヨコナデを施す。このようにして高杯の成形は2日ほどで完了する。この後は乾燥の進み具合を観察しながらミガキやケズリを施して仕上げる。これには3日ほどの日時を要する。

(2) 「江平技法」による復元製作体験

「江平技法」による高杯成形法は、杯部を正立した状態から作り始める。ロクロ盤面に木の葉を敷き、粘土円板を圧着する。粘土紐を1本貼り付け、杯部の底部を成形する。この時の内底面は播鉢状を呈している。4時間半ほど放置して乾燥による表面の硬化を促し、体部の成形に作業を進めた。粘土紐3本を圧着しながら、ほぼ真上に積み重ねた。次にロクロを回しながら引き伸ばしつつ、「コテ」を用いて口縁部を広げ、外傾した形状に成形した。口縁部はヨコナデを施して仕上げた。乾燥のためロクロから取り外す前に底部中央に穿孔した。これは、前述のように江平遺跡出土資料に底部の孔を埋めた痕跡があるからである。しかし、この時点でわざわざ穿孔するのは何か不自然である。底部を円板の土台にしないで、直径4～6cmの粘土紐の輪を土台にして皿状の底部を作り上げているのかもしれない。このようにするとロクロ盤面に接着している部分は少なくて済むので、ロクロから取り外しやすいただろう。木の葉を敷く必要がないかもしれない。ロクロから取り外した杯部は、「古宿技法」で成形した脚部と同様に一晩くらい乾燥させる。口縁部が乾燥して型崩れをおこさない頃を見計らってロクロに倒立させる。ロクロの中心と、土器の中心が同じになるように調整した。このとき、底部の孔が中心を取る時の良い目安になった。脚部の成形作業の準備のため、杯部を動かないように粘土で固着し、「カキベラ」や「カンナ」で外底面の余分な粘土をかきとり丸底にした。底部の孔のまわりから1本目の粘土紐を貼り付け、5本の粘土紐を積み上げて脚部を成形した。江平遺跡出土資料の脚部の形状は、古宿遺跡出土資料と異なりほぼラップ状に開いているので、脚部を円柱状にすぼめる作業は行わなかった。また、モデルにした江平遺跡出土資料の脚部は中空ではなく、脚上部は粘土が埋まった状態である。しかし、復元製作では、脚基部の接合状態が観察できるように中空に仕上げた。作品をロクロからはずし、3時間半ほど倒立させたままで脚部を乾かした後、最後に粘土塊で杯底部の孔を塞いだ。江平遺跡出土資料はミガキが加えられていないので、成形を完了した状態で乾燥に入ったが、乾燥の過程で穴埋めをした部分に亀裂が入った。穴埋めをした粘土塊と器面とのあいだに乾燥の差があったからと思われる。

「古宿技法」では、半乾燥状態にするのは脚部成形後、杯体部の成形に移る時だけである。

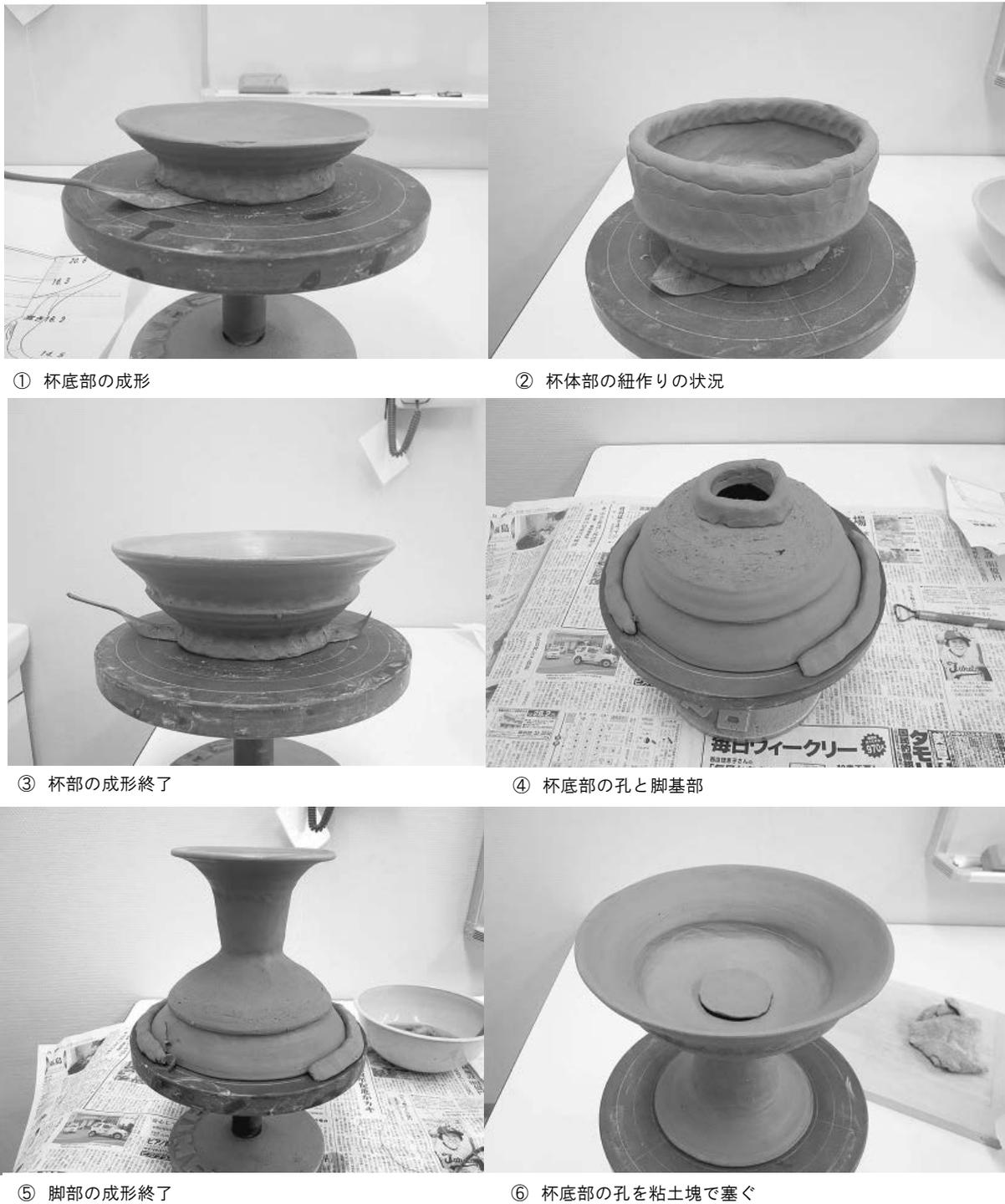


図4 「江平技法」による高杯の成形

しかし「江平技法」では杯底部の成形後の1回、杯部成形後脚部成形に移る時に1回、さらに孔を塞ぐ時にもう1回乾燥を待たなければならない。

3 南小泉式高杯の成形技法の分布

前項では、南小泉式高杯の2種類の成形技法を復元製作で示した。次に2種類の成形技法の分布範囲や系譜をたどってみたい。

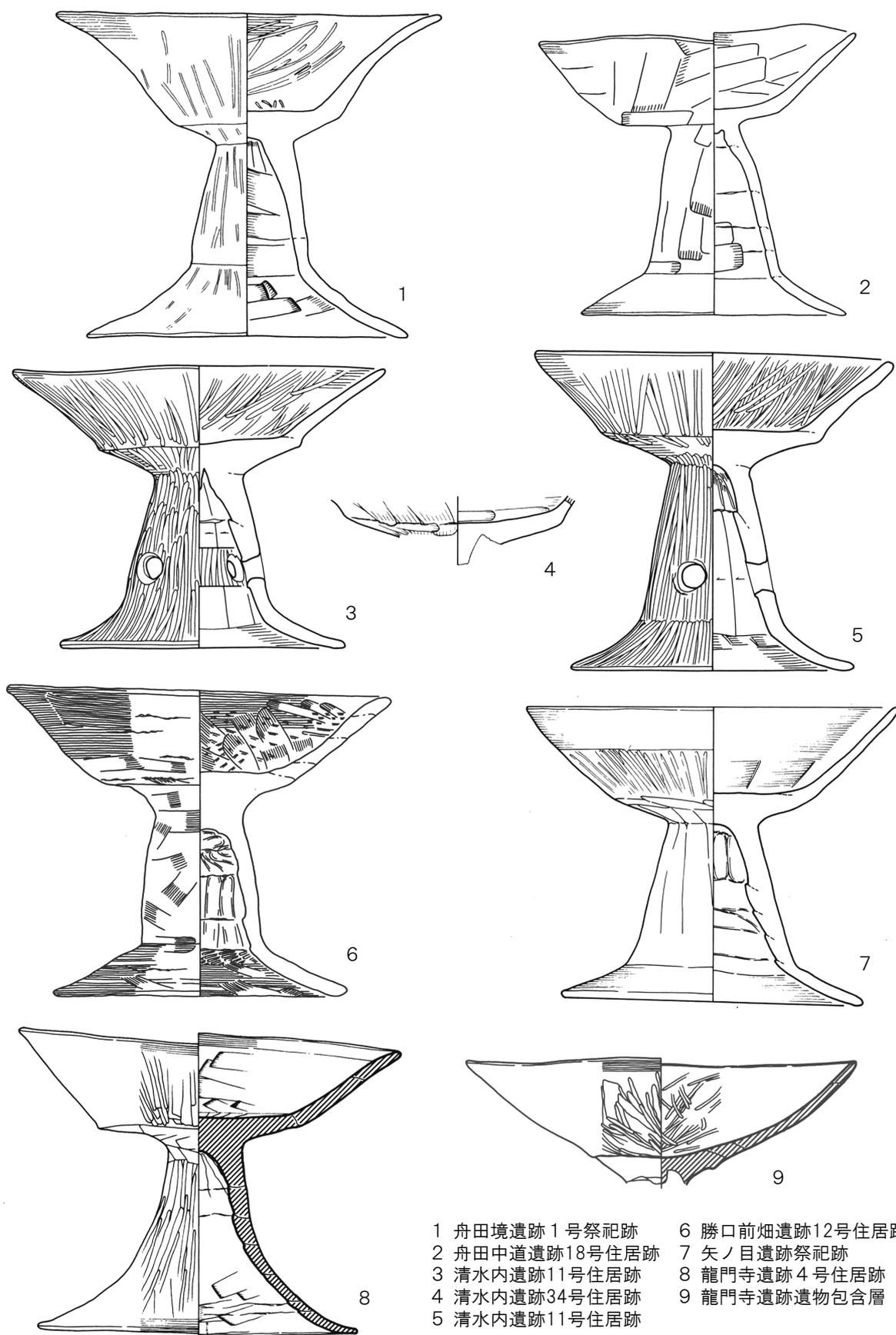
福島県中通り地方南部では、白河市舟田境遺跡^(註3)や隣接する舟田中道遺跡^(註4)で当該時期の資料が出土している。大部分は内底面が平坦な高杯(図5-1)なので、「古宿技法」が多く用いられているようだが、18号住居跡出土高杯の中に、「江平技法」と思われる内底面が播鉢状で脚基部内面に突起のある高杯(図5-2)が1点認められる。

県中央部の郡山市清水内遺跡^(註5)は、当該時期の住居跡131軒からなる大規模な集落跡である。特に5区の11居跡では多数の高杯が出土しており、報告書には37点の高杯が図示されている。このうち5点は内底面が平坦にも関わらず中央に浅いくぼみがあり、さらに脚基部内面に突起がある。また、6区の34号住居跡では脚部のはずれた跡が突起状になっている杯部破片(図5-4)が出土している。これらのことから、「古宿技法」により成形された高杯が多いものの、「江平技法」の高杯も含まれるようである。また、杯底部を土台として脚部から先に成形しながらも、中央に孔が開くように粘土紐で円板を作る両者折衷のような技法(図5-3)も行われたようである。

中通り地方北部では、福島市勝口前畑遺跡^(註6)で当該時期の7軒の住居跡が調査された。これらの住居跡から出土した高杯は杯部内底面が平坦なものが多く、すべて「古宿技法」で成形されたと思われる。国見町矢ノ目遺跡^(註7)では当該時期の祭祀遺跡が調査された。石製模造品と高杯・小型丸底壺から構成された祭祀跡で、20点ほどの高杯の成形技法はすべて「古宿技法」である。

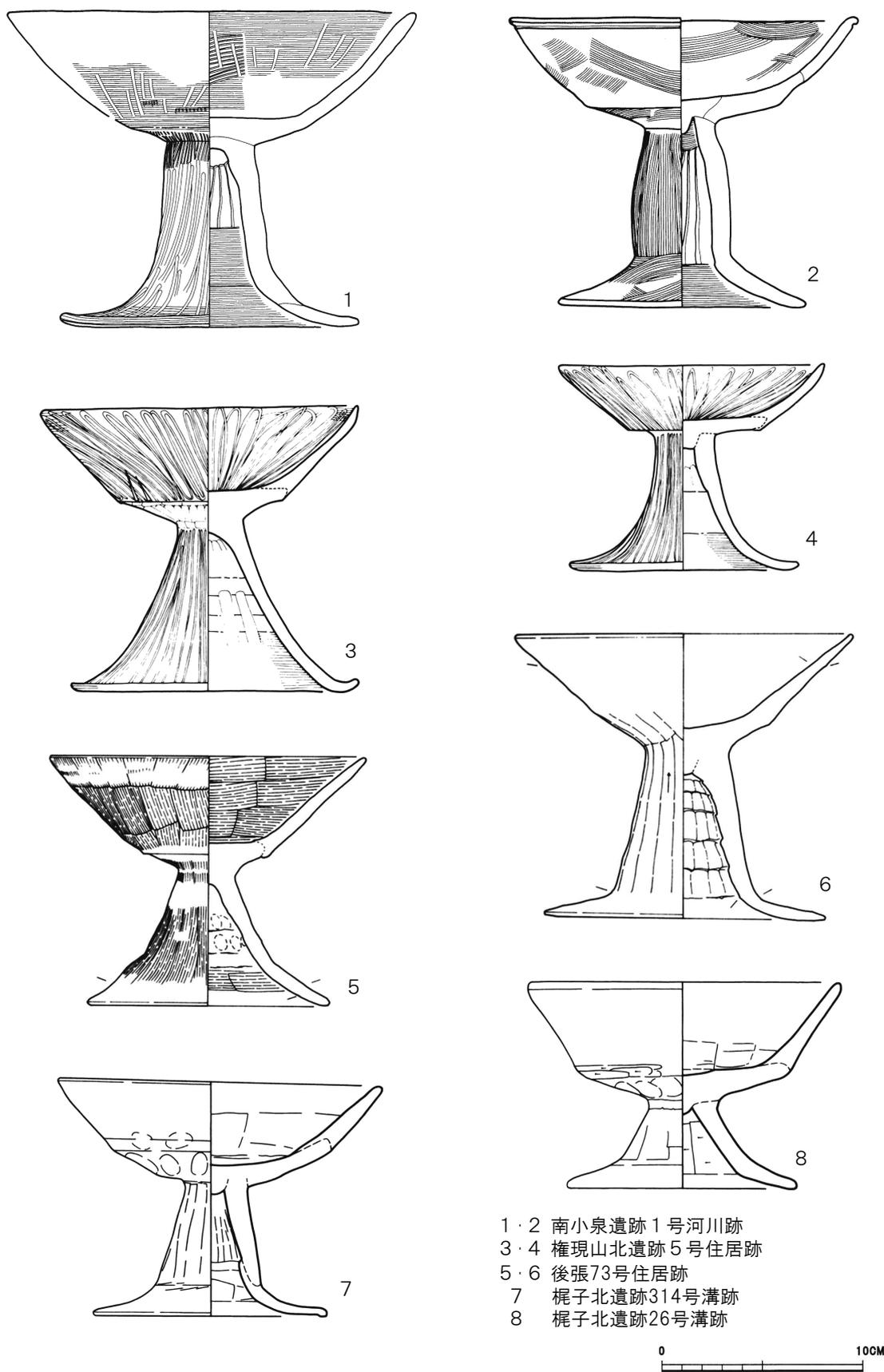
浜通り地方のいわき市域の龍門寺遺跡^(註8)では当該時期の住居跡4軒が調査された。住居跡から出土した高杯はほとんど「古宿技法」で作られているが、遺物包含層から「江平技法」で成形された高杯杯部(図5-9)が出土している。

福島県内における南小泉式高杯の成形技法は、杯底部を土台に脚部から成形する「古宿技法」によるものが主体的であることが、以上の各遺跡の出土高杯の検討から明らかになった。それでは、本県の周辺地域では、当該時期の高杯の成形技法はどうなっているだろうか。周辺地域の次の各遺跡について検討してみる。北隣の宮城県は仙台市の南小泉遺跡、関東地方は栃木県宇都宮市権現山北遺跡、埼玉県本庄市後張遺跡、東海地方の静岡県浜松市の梶子北遺跡の4例である。南小泉遺跡は26次調査と30次調査の類例^(註9)を見てみよう。26次調査では河川跡の調査が行われ、当該時期の高杯がまとまって出土している。報告書に図示されている高杯は15点である。このうち「古宿技法」によって成形されたと思われるものは2点、「江平技法」と思われるものは11点で、のこりはどちらとも言えないものである。一方、30次調査では26号住居跡で10点の高杯が出土しているが、5点が「古宿技法」で成形され、「江平技法」と思われるものは1点だけである。栃木県の権現山北遺跡^(註10)では当該時期の住居跡が3軒調査された。14点の高杯が出土しているが、「江平技法」と思われるものは2点だけで、残りの12点は「古宿技法」によって成形されている。福島県の状況に良く類似している。埼玉県の後張遺跡^(註11)の調査成果から、当該時期と考えられる56号住居跡と73号住居跡を選択した。56号住居跡では6点の高杯が出土している。この中に内底面は平坦だが、脚基部内側に突起のある高杯がある。このような例は郡山市の清水内11号住居跡の出土高杯の一部と



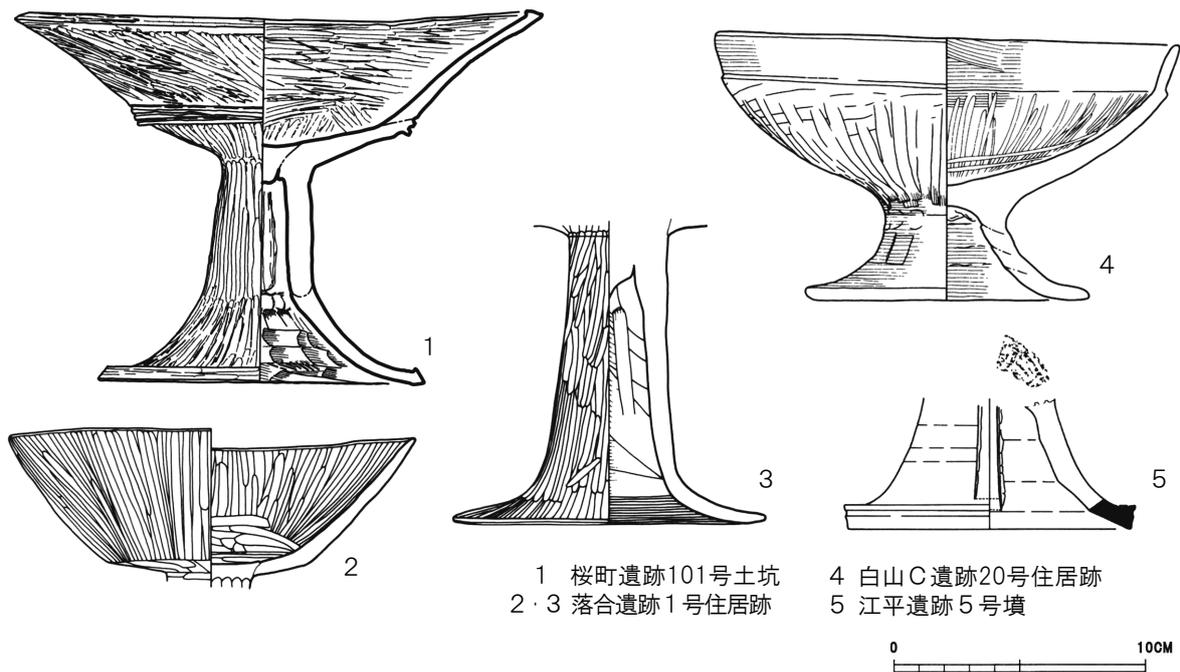
- | | |
|----------------|----------------|
| 1 舟田境遺跡1号祭祀跡 | 6 勝口前畑遺跡12号住居跡 |
| 2 舟田中道遺跡18号住居跡 | 7 矢ノ目遺跡祭祀跡 |
| 3 清水内遺跡11号住居跡 | 8 龍門寺遺跡4号住居跡 |
| 4 清水内遺跡34号住居跡 | 9 龍門寺遺跡遺物包含層 |
| 5 清水内遺跡11号住居跡 | |

図5 福島県内各地の高杯



- 1・2 南小泉遺跡1号河川跡
- 3・4 権現山北遺跡5号住居跡
- 5・6 後張73号住居跡
- 7 梶子北遺跡314号溝跡
- 8 梶子北遺跡26号溝跡

図6 福島県外各地の高杯



1 桜町遺跡101号土坑
2・3 落合遺跡1号住居跡

4 白山C遺跡20号住居跡
5 江平遺跡5号墳

図7 前後の時期の高杯

共通する例である。73号住居跡では20点の高杯が出土しているが、「古宿技法」によって作られたと思われる高杯は1点(図6-5)だけである。後張遺跡では「江平技法」が卓越している。静岡県の子北遺跡^(註12)では、g区314号溝跡から25点の当該時期に相当する高杯が出土している。これらの高杯の成形技法は、ほとんど「江平技法」で「古宿技法」の高杯は認められない。1区26号溝跡では17点の高杯が出土しているが、ここでも「古宿技法」で成形されたと思われるものは見られない。

4 ま と め

高杯の杯底部を土台として脚部から成形する「古宿技法」と、杯部から成形をはじめ最後に杯底部の孔を塞ぐ「江平技法」の分布を、福島県内と隣県の遺跡及び東海地方の遺跡まで類例を求めてみた。その結果、「古宿技法」で成形された高杯は、福島県を中心に北は宮城県、南は栃木県まで分布することがわかった。一方、「江平技法」は、福島県を中心とした地域では客体的な技法だが、関東地方から東海地方ではメインの成形技法である。福島県から見れば、分布の中心は西に偏っているといえることができる。

以上のように、両技法の分布範囲をある程度明らかにすることができた。次は両技法がどのような系譜の元に成立したのか検討したい。南小泉式高杯の祖形は、前型式の塩釜式の高杯に求めることができる。とすれば、その成形技法もまた塩釜式高杯に求められるのではないだろうか。そこで、塩釜式期の集落跡である小野町落合遺跡^(註13)出土の高杯を調べてみた。その結果、1号住居跡出土の高杯(図7-2・3)の中に「江平技法」で行われる孔塞ぎの痕跡を見出すことができた。さらに、北陸系の弥生土器を多く出土した湯川村桜町遺跡^(註14)では、101号土坑から出土した北陸系高杯(図7-1)が「江平技法」によって成形されている。こ

のことから、「江平技法」は古く弥生時代から行われてきた、伝統的な高杯の成形技法であることがわかった。これに対し、「古宿技法」で成形した高杯は見出すことができなかった。つまり、「古宿技法」は前型式から継承された技法ではなく、南小泉式土師器の中で生まれたオリジナルな技法の可能性が考えられるのである。南小泉式土師器の器種組成は、その後半期で杯が卓越してくる傾向にある。この流れの中で、高杯は食膳具の中で客体的な存在となってゆく。やがて、杯の中に須恵器を模倣した器形が現れる頃、南小泉式独特の長脚の高杯は徐々にその姿を消し、図7-4のような須恵器模倣杯などに短い脚をつけた高杯が現れる。この種の高杯の成形技法は、杯を成形し底部も丸く仕上げしてから、倒立で脚部を成形する技法である。この技法は同時期の須恵器高杯で行われる技法である。図7-5は須恵器高杯の脚部破片だが、杯部との接合面に脚部を接合する時に、杯部底面に施された同心円の沈線の痕跡が見られる。このように、南小泉式の高杯の消滅に伴って、その成形技法も「古宿技法」・「江平技法」ともに次型式には継承されない。

<註>

- (註1) 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター 1985 「浜井場B遺跡・舌内塚・舌内板碑群・古宿遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告25』
- (註2) 福島県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団 2002 「江平遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告12』
- (註3) 白河市教育委員会 2000 「舟田境遺跡」『ほ場整備事業舟田地区関連遺跡発掘調査報告1』
- (註4) 白河市教育委員会 2001 「舟田中道遺跡1」『ほ場整備事業舟田地区関連遺跡発掘調査報告2』
- (註5) 郡山市教育委員会・(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1997 『御前南土地区画整理事業関連清水内遺跡—5区調査報告—』
郡山市教育委員会・(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団 1999 『御前南土地区画整理事業関連清水内遺跡—5区調査報告—』
- (註6) 福島市教育委員会・(財)福島県振興公社 1995 「勝口前畑遺跡2」『一般国道13号線福島西道路関連遺跡発掘調査報告』
- (註7) 福島県教育委員会 1980 「矢ノ目遺跡」『伊達西部地区遺跡発掘調査報告』
- (註8) いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団 1985 『龍門寺遺跡』
- (註9) 仙台市教育委員会 1998 『南小泉遺跡』
- (註10) 宇都宮市教育委員会 1979 『権現山北遺跡』
- (註11) (財)埼玉県埋蔵文化財センター 1983 「後張遺跡」『関越自動車道関連埋蔵文化財調査報告XV』
- (註12) (財)浜松市文化振興財団 2006 『梶子北遺跡(三永地区)—古墳・奈良時代編—』
- (註13) 福島県教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団 1995 「落合遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告29』
- (註14) 福島県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団 2011 「桜町遺跡(2次)」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告10』
- (註15) 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター 1999 「白山C遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告3』
- (註16) 福島県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団 2002 「江平遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告12』